

博物館のディレンマ

——スミソニアン航空宇宙博物館の原爆展論争に関する一考察——

生涯教育計画コース 山 本 珠 美

The Dilemmas of Museums :

A Study of the *Enola=Gay* Controversy in the U.S.National Air and Space Museum

Tamami YAMAMOTO

Public Museums, born in modern times, contain two dilemmas. One dilemma is “Who owns a museum?” Generally, a museum forms its collection according to academic elites’ value system, so only parts of the public go there. Lately many museums attempt to have various communities join in planning exhibition for democratization of culture and equality of cultural opportunity. But ironically this causes the crisis of museum identities. The other dilemma is “Is a museum a temple or a forum?” Museological changes transfer “a museum as a temple” into “a museum as a forum”, where visitors analyze the display while going through the hall. But the general public tend to consider a museum as a temple, where they celebrate the display without critical perspectives.

The same dilemmas were seen in the U.S.National Air and Space Museum (NASM). From 1993 to 1995, the planned *Enola=Gay* exhibition, commemorating the 50th anniversary of the end of the World War II, provoked rage around the country. “Which owns NASM, academic elites or retired soldiers?” “What is the goal of NASM, education or celebration?” The *Enola=Gay* controversy throws fundamental problems to American museum world.

目 次

はじめに

I 博物館のディレンマ

A 第一のディレンマ：博物館は誰のものか

B 第二のディレンマ：博物館は神殿か、フォーラムか

II 原爆展論争：2つのディレンマの表面化

A NASMとAFAとの緊張関係：NASM第一のディレンマ

B 称賛か、分析か：NASM第二のディレンマ

おわりに

はじめに

本稿は現代の博物館が抱えるディレンマについて、アメリカ合衆国のスミソニアン航空宇宙博物館(National Air and Space Museum, 以下NASMと記

載)の原爆展論争に触れながら、考察するものである。

原爆展について、管見の限り日本の博物館関係者から何のコメントも出されていないのは残念なことである。NASMは1995年に第二次世界大戦終結50周年を記念して、「歴史の岐路：第二次世界大戦の終結、原爆そして冷戦の起源(Crossroads: The End of World War II, The Atomic Bomb, and the Origins of the Cold War)」展(本稿では以下、原爆展と記載)を計画した。これは広島に原爆を投下したB29エノラ=ゲイをはじめ、爆心地の惨状の写真や被爆品、及び原爆投下それ自体を再吟味する説明パネルが展示される予定だった。しかし、展示台本の記述をめぐって空軍協会(Air Force Association, 以下AFAと記載)・在郷軍人会(American Legion)から猛烈な反対がおこり、マスコミによる攻撃や政治的圧力も加わり、結局エノラ=ゲイの機体だけが展示されることとなった。¹⁾この論争は日本でもマスコミの報道を通して広く知られている。

NASMの属するスミソニアン協会は「人類の知識の

増進と普及のために」設立された非営利の研究・教育機関である。²⁾しかし原爆展論争で明らかになったのは、反米的な展示は世間から非難を浴び、開催もままならないということだった。

合衆国では、従来から、展示の可否をめぐる多くの論争がなされてきた。それは過去においては美術館における芸術作品の猥褻性をめぐるものであり、また1960年代以降は歴史博物館における多様な文化的背景を博物館に反映させるもの、即ちリヴィジョニスト（歴史修正主義者）によるWASP中心史観の訂正を促すものであった。³⁾原爆展は一般に後者の行き過ぎがもたらしたものと見られているが、このような展示のキャンセルはここ数年日常茶飯事と化している。

何故博物館展示をめぐる論争が絶えないのか。表面的なテキスト解釈の違いという以上に、現代の博物館が抱えるディレンマに問題の根源はある。本稿ではまず今日の博物館が共通に抱えるディレンマについて原理的考察を行い、続いて近年の合衆国における博物館展示の変化とNASMの問題について述べることにする。

I 博物館のディレンマ

合衆国では1960年代になると博物館のあり方に批判が集中した。日常生活や世界情勢とは無縁の博物館活動に対する抗議活動を受けて、従来の活動の枠を超えたアウトリーチの活動や、貧困・麻薬といった社会問題への関与がなされるようになった。また、従来博物館界から疎外されていたマイノリティ自身の手になる博物館設立運動がおこり、既存の博物館でも合衆国市民の多様な文化的背景を反映させるような展示活動が始められた。

しかしこのような活動の広がりは博物館にアイデンティティ・クライシスを引き起こした。博物館とはそもそも何か。この問題は60年代以降盛んに論じられることになったが、中でもDuncan F. Cameron（ブルックリン博物館）の論文「博物館は神殿か、フォーラムか」⁴⁾は、価値の一元的付与機関としての博物館（神殿）に対し、論争の場として博物館（フォーラム）の創造を主張した点で、博物館のあり方を考えるにあたり興味深い。以下、Cameronの上掲論文を参照しつつ、博物館が抱えるディレンマを2点にわけて論ずる。

A 第一のディレンマ：博物館は誰のものか

博物館の基盤は、古代から現代に至る、人類の普遍的行為としての「収集」にある。しかし公共博物館（public museum）誕生⁵⁾の前後ではコレクションの意味が

違っている。公共博物館誕生以前は、コレクションはあくまでもコレクター個人のものであり、コレクションは全く個人的なものにすぎなかった。それは「私たちの」コレクションではなく「彼／彼女の」コレクションであり、「彼／彼女の」認識にすぎなかった。

公共博物館は私的コレクションの一般公開から生まれたが、博物館活動は単なるコレクションの公開から、次第に「民主的な博物館（democratic museum）」という思想に基づく活動に移っていった。

民主的な博物館とは、教育やレクリエーションを目的として、コレクションを収集し、一般に公開する博物館のことを言う。しかしコレクションが公共のものであると宣言することは、もはや「彼／彼女の」コレクションであるということの意味しない。これは「私たちの」コレクションであり、それゆえ「私たち」にとって意味のあるものでなければならない。即ち市民は展示され解説されるコレクションが、社会の価値観やリアリティに関する集合的認識と一致することを期待する。

しかし公共コレクションの形成、及び展示に表れるその解釈には少なからぬ問題がある。「私たちの」コレクションとはいえ、「私たち」自身、多様な価値観・認識を持っている。概して公共博物館におけるコレクション形成はアカデミックな訓練を受けた知的エリートに任されているが、彼らの認識と他の市民の認識にはしばしばズレが生じる（知的エリート層による文化の支配）。⁶⁾彼らはアカデミズム特有のモデルに従ってコレクションを形成・解釈するが、それはコレクションの選択・展示のプライオリティを決定する価値体系が中流より上の階層に好まれる体系に偏ることを意味し、そのため来館者にも偏りが生じてしまう（このことは特に美術館に当てはまる；文化階層の問題）。⁷⁾事実、大衆文化や民俗文化・マイノリティの文化は排除され、ブルジョワや貴族の遺産がコレクションの中心となってきたのである。

博物館に散りばめられた難解なコードと相俟って、公共コレクションは教育程度の高い人々しか十分に理解することはできない。しかし一方で市民はそのような博物館を卓越さの基準を表している場と考えてきた。博物館は、自らの私的認識を、社会で受けいられている客観的視点と比較し、訂正することのできる場であった。

これがいわば「神殿としての博物館」である。もちろんこのような博物館は改善を加える必要がある。来館者に判読できないコードから成る展示は、解読可能なものに変えること、過去のブルジョワや貴族文化を表象しているコレクションは、大衆文化や民俗芸術・農民や労働者階級のライフスタイルのコンテクストの中におくこと、

等である。これは博物館における文化の民主化 (democratization of culture), あるいは文化的機会の平等 (equality of cultural opportunity) にとって必要である。

60年代以降の多様な文化的背景を博物館に反映させるための運動はこの延長線上にある。「低級」であるという理由で従来博物館という神殿から排除されてきた者たちが、声をあげ、自らの文化を博物館に認めさせることに成功したのである。知的エリート層による文化支配の問題を緩和するため、近年では学芸員のみならず、当該コミュニティの代表をも収集・展示作成プロセスに参画させる試みも盛んである。⁸⁾ しかしそのことは博物館に収集・展示すべきものの基準を曖昧にすることになった。「誰が博物館を作るのか。」「博物館は誰のものなのか。」これが第一のディレンマである。

B 第二のディレンマ：博物館は神殿か、フォーラムか

神殿としての博物館は、唯一の正しい認識を与える場であるという点で旧来のものにすぎない。そこでCameronは神殿としての博物館とは別に、対立・実験・討論のための「フォーラムとしての博物館」の創造が欠かせないと主張する。芸術様式の最もラディカルな革新や、最も論争的な歴史・社会・世界全体の問題に関する様々な解釈に対して発表の場を保障し、それについては市民の判断や時間の判断を仰ぐ…そういう博物館である。このように考えれば、博物館が論争的となっている問題に積極的に関わることは何ら問題ないと言える。否、むしろ公共的な教育施設として（例えば環境問題や都市問題のような）ホットな問題に対し、人々に思考の糧を提供する活動は、これを積極的に展開する義務があるとさえ言える。

Cameronは神殿としての博物館とフォーラムとしての博物館を混同しないように、「フォーラムは戦いが交わされる場であり、神殿は勝者が保存される場である。前者はプロセスであり、後者は結果である。」⁹⁾と述べ、両者を分離して考えるよう注意している。しかし同じ「博物館」と名乗っている以上そこには混乱が生まれる。

合衆国における「私たち」は決して一枚岩ではない上、現代のようにあらゆる価値に疑義が呈される時代には客観的かつ普遍的な「知」というものは考えにくい。卓越性の基準が定かではない以上、神殿としての博物館の存在は疑わしい。むしろ「フォーラムではない博物館を考える博物館職員などいない」¹⁰⁾というのが、博物館界の常識であろう。しかし、市民レベルでの博物館認識はど

うか。芸術作品にしろアンティークにしろ、店頭や道ばたに無造作に置いてある時には価値あるものとして顧みられることのなかった代物でも、一旦博物館に受け入れられると、それはある価値を帯びたものと見られる。¹¹⁾ あるものが博物館外にある時、私たちは全く自由にそれを受け入れるか受け入れないか、好きか嫌いかを判断する。しかし一旦博物館に入ると、私たちは「これは立派なものだ」「これは重要だ」「これは本物だ」と専門家が判断を下したという事実を知った上で理解することになる。市民のレベルでは依然「博物館＝神殿」の意識が強いのである。このような博物館の市民に対して持つ特殊な性格は一朝一夕に変わるものではない。

フォーラムとしての博物館の目的は、既成の価値観から自由になって、諸々の問題に対する新しい挑戦的な認識や斬新な価値・表現を、すべての人が享受し、判断できるようにすることである。革新や変化への提案を無視したり抑圧したりすることは、新しいものを新しいという理由で受け入れるのと同様、思慮に欠ける態度である。しかし、神殿としての博物館という観念にとらわれている人は次のように問うだろう。もし、博物館があらゆる革新や実験に門戸を開放したならば、私たちは博物館の判断の価値を信じ続けることができるだろうか。また逆に、あらゆる革新、実験をそれがたまたま博物館に入ったからと言う理由で、私たちは無条件にその重要性を受け入れ始めてしまうのではないかと。

博物館界の理論「博物館＝フォーラム」と市民レベルでの認識「博物館＝神殿」のズレ。これが第二のディレンマである。

II 原爆展論争：2つのディレンマの表面化

A NASMとAFAとの緊張関係：NASMの第一のディレンマ

原爆展論争は、表面的にはAFA（及び在郷軍人会）とNASMの原爆投下をめぐる歴史解釈の違いによって生じたと解されるが、より根本的には、I節で述べた博物館の2つのディレンマが原因となっている。

まず原爆展論争の一方の当事者であるAFAについて簡単に述べておこう。¹²⁾

AFAは現役・退役空軍兵士の属する単なる非営利団体ではなく、航空産業（ロッキード、ボーイング等）による援助を受けた「軍産複合体」である。1946年空軍司令官Hap ArnoldとJimmy Doolittleの主導により、空軍の独立、戦後の予算カットの防御、空軍の重要性の啓蒙等のために設立された。設立以来、ケネディ政権時

の部分的核実験停止条約の批准やジョンソン政権時のヴェトナム戦争での核兵器不使用に反対したり、あるいは平和運動・軍縮運動に対抗してきた。しかし冷戦終結後の軍事予算の削減、あるいは若者の軍隊離れによって、AFAは危機感を強めていた。AFA発行のAIR FORCE Magazineの編集長で反原爆展キャンペーンの中心的人物、John T. Correllは、その原因の一端がメディアや娯楽産業が軍隊を否定的イメージで描いていることにあると考えていた。従ってAFAは世界で最も人気ある博物館の一つであるNASMで空軍がどのように扱われるか、念入りな注意を払っていたのである。

そしてNASMは、同じく1946年にArnoldの尽力によって設立されたのである。Arnoldは戦時の航空学への関心を次世代にも伝えたいと考えていた。彼は多くの航空機をスクラップ化から防ぎ、航空産業界から請願書を集め、議会に博物館設立を要請した。以来AFAとNASMは密接な関係を保ってきた。

NASMの活動は航空機の収集・展示にとどまらず、他の理工系博物館と同じくハードウェアに焦点を当て、航空技術の進化という観点から研究を行っていた。ここでは技術の発展に対する楽観的な進歩主義が前提となっており、航空の及ぼす社会的影響という観点は皆無だった。旅客機・軍用機などからなる陳列品（その多くは機体が企業のロゴで飾られている）は航空技術を称賛し、戦争の目的や敵の損害など、否定的側面は無視された。NASMはAFAが望むイメージを普及することに貢献してきたのであり、このような姿勢でいる限りAFAとは何の齟齬もきたさなかった。¹³⁾

そもそも航空宇宙博物館などの理工系博物館は、国家の威信を高めるためのイデオロギッシュな存在である。現代の国家は、将来にわたり国際的なハイテク競争に勝利を収めるために、青少年を科学・技術へひきつけねばならない。そのため、概して理工系博物館は、科学・技術は善であり、科学・技術の発達によってこそ人類は進歩するという史観に基づいている。科学技術信仰・科学技術ユートピア主義・進歩のイデオロギーが積極的に鼓吹されているのである。¹⁴⁾

しかし1970年代末になると、反対の声があがるようになった。¹⁵⁾ 科学・技術史上の重要品を単に並べるのではなく、科学・技術と社会との相互関係について批判的検討を加えること、即ち一面的な世界観ではなく、全体性の復権が求められるようになったのである。¹⁶⁾ NASMでも、社会的コンテクストから切り離れた陳列品の単なる展示や企業製品のショールーム化は「航空技術の栄光を讃える神殿」あるいは「航空宇宙産業の巨大な広告」と

化していると批判され、技術を単に人類に有益な問題解決手段として展示することは学術的にも道義的にも受け入れがたいと見なされるようになった。

このような情勢の中、1987年コーネル大学の宇宙物理学者Martin Harwitが館長に就任した。HarwitはAFAとの友好関係を維持する努力をする¹⁷⁾一方、戦争の悲惨さなどに言及することなく、ただ機体を展示するだけでは十分でないと考え、早速、良い面悪い面を含め、航空宇宙技術の社会的影響に関する展示を開始した。一例を挙げよう。NASMでは従来ナチの製造したV-2ロケットの展示にさえ技術の進歩という観点からみた重要性しか説明されていなかった。しかし1990年には新しいパネルによって、それが無差別攻撃のために使われたこと、強制収容所で作られ製造過程で何千という人が死んだこと、多くの科学者が自らの仕事に伴う倫理的問題に取り組むことを避けてきたことの説明が加えられた。技術が及ぼす致命的影響について、初めて言及されたのである。¹⁸⁾

Harwit館長の下、次第に独自の歩みを始めたNASMに対して、AFAは危機感を抱いた。この辺の事情について歴史家Barton J. Bernsteinは次のように述べている。「ハーウィットが館長に任命されるまでは、国立航空宇宙博物館は実質的に航空産業界と空軍協会、そして米国空軍の付属機関のようなものだったから、コレルや他の人々は、『自分たち』の博物館が自分たちの手で牛耳れないことも怒っていたようだ。彼らは博物館を奪還することを強く望んでいた。」¹⁹⁾

歴史家Mike Wallaceも同様の見解から、次のように述べている。「テキストをめぐる表面的な論争の下にある構造的な問題に気付くだろう。エノラ=ゲイがどのように解釈されるべきか、それは確かに重要だった。広島の意味をどのように解釈すべきか、それはAFA、航空宇宙博物館双方にとって非常に重要な問題であった。…しかし学芸員の計画したエノラ=ゲイ展示は一連の博物館理論の最新のものであり、AFAのリーダーたちの眼には“我々の”博物館が乗っ取られつつあるということを警告するものと映ったのだ。」²⁰⁾

「博物館は誰のものか」という問いに対しては、建前上、アメリカ市民全員のものだと答えることができる。しかし実際の運営を司るのは誰か。AFAとNASMの争いは、原爆投下の解釈上の違いというよりも、むしろ軍人と学者との博物館施設の支配権をめぐる争いだった。「博物館は誰が作るのか」「博物館は誰のものか」という第一のディレンマがここに表れている。

B 称賛か、分析か：NASMの第二のディレンマ

更に、両者の博物館認識が明らかに違っていた。AF A側のCorrellは、来館者がNASMに期待するのは昔の航空機であって「アカデミックな活動家が押しつけるカウンターカルチャー的道德などには関心がない」と考えていた。²¹⁾ それ故、学問界の見解よりも原爆投下の愛国的神話を博物館に望んでいた。彼は博物館を過去の栄光ある遺物を祭る「神殿」と考えていた。

一方、NASMは博物館学上の理論の変化を受けて、博物館を航空技術と社会の関係に関する問題提起の場と考えていた。Harwitは1994年8月7日、原爆投下49周年記念にあわせたWashington Postの特集記事で、太平洋戦争で残虐な敵を打ち倒した勇敢な退役軍人に敬意を表す一方、これからの世代はその戦争の歴史の全容を知る権利があると主張した。「これは、見識ある市民の上に築かれる民主社会において、ナショナル・ミュージアムが果たすべき使命である。エノラ＝ゲイを展示するだけで、すべての人々を満足させることはできない。しかし、包括的で熟慮を重ねた検討を行えば、歴史から学ぶことができる。それこそが、この博物館が見学者に提供したいものなのである。」²²⁾ 同じく第9代スミソニアン協会会長に就任したI. Michael Heymanも、1994年9月の就任式で博物館が歴史に対して負う義務を次のように語った。「第二次世界大戦終結50周年記念を無視し、コメント抜きで単にエノラ＝ゲイを展示していれば、また、原爆使用の正当性のみを説いて反対意見の紹介や爆心地の衝撃の説明をせずにいれば、スミソニアン協会は論争を避けることができたであろう。私の見解は、スミソニアン博物館にはもっと大きな役割があるということである。いわゆる『米国の保管室』の中にある記念物を、単に展示するだけではいけない。また展示がもたらす政治的問題を恐れるあまり重要な問題を通じてはならないのだ。」²³⁾ NASMは現在の学問成果を一般の人々に伝えることを第一義としていた。過去に発展してきた博物館の理論に従い、Harwitはスミソニアン協会及びNASMの責務を大衆の教育と考えていた。来館者に考えてもらうためには展示物だけでは足りず、解説文や写真・関連品など多くの情報を与えることが必要だった。そしてNASMの準備した展示台本は1994年2月7日の展示諮問委員会では基本的に立派な学問的労作という評価をうけていたのである。

但し、学芸員たちは自らの歴史認識を押しつけようという意図を持っていたわけではない。彼らは定説に準拠し、多くの歴史家がどのように原爆投下の問題を扱ってきたかを来館者に知らせ、(原爆投下はソ連牽制の意味

があったか否かなどの) 解決されていない問題については立場を定めず論点を紹介するにとどめていた。展示台本は学問的コンセンサスに沿ったものだったのである。²⁴⁾ それ故、原爆史家として評価を得ている元海軍士官Martin J. Sherwin (ダートマス大学、同諮問委員会の一員) の目には「展示台本の原稿は、戦時下の原爆開発史の書き換えを歴史家に迫った、機密扱いを解かれた最高機密文書類を垣間見せただけのもの」にすぎず、「これらの文書をよく知っている我々のような人間にとっては、学芸員はあたかも歴史調査を犠牲にし、既成の神話に腫れ物にさわるような注意を払っているかのよう」に²⁵⁾ 映った程である。NASMは原爆投下に関する様々な解釈を紹介する「フォーラム」として振る舞おうとしたのである。

スミソニアン側は展示台本初稿が出来上がる以前の1993年の段階で既に、退役軍人からの圧力が加わることを恐れていた。当時のスミソニアン協会会長Robert McC. AdamsはHarwit館長に対して原爆に焦点をあてた展示計画に強い懸念の意を表していた。Adamsの覚え書きを読んだ原爆展企画責任者Tom Crouchは、1993年7月21日付書簡でHarwitに次のように書き送ったという。「あなたは退役軍人たちの気分を高揚するような展示をしたいのでしょうか、それとも日本への原爆投下の重大な結果について見学者に考えさせたいのでしょうか。はっきり言って、私たちは二つを同時にすることはできないと思います。」²⁶⁾

しかし、1995年明けてすぐ、両者の決着はついた。スミソニアンは運営予算の70%を政府支出金に依存している。数々の政治的圧力を受け、Heyman会長は就任式での言葉とは裏腹に軍人の言い分を認めてしまった。彼はエノラ＝ゲイだけを残し、展示台本、写真、遺品、ビデオテープ等は一切展示から取り除くことに決めた。1995年1月29日、Heymanは次のような声明を出した。「この記念すべき重要な年に退役軍人とその家族たちは、祖国が自分たちの戦場で示した勇気と犠牲を称賛し、祝ってくれることを期待していたのです。実際、その期待は当然でありましょう。彼らは分析を求めていたわけではなかったのです。率直に言うならば、そのような分析がもたらす心の痛みに、我々博物館は十分配慮しなかったのであります。」²⁷⁾

Crouchの「高揚か、考察か」、Heymanの「称賛か、分析か」という対立²⁸⁾は、今に始まったわけではない。それはNASMの設立経緯自体に深く根ざしており、実際、設立の推進力になったのは伝統的な(そして建前的な)「教育施設としての博物館」を唱えることではなく、

むしろ「過去の栄光を称賛する施設としての博物館」を作るという意図だったのである。²⁹⁾「神殿」としての博物館では、人は高揚感を味わい、展示されたものに称賛の拍手を浴びせる。「フォーラム」としての博物館では説明パネルに依りながら、与えられたテーマを批判的に分析する。博物館認識が一様ではない以上、前者を求めて博物館に足を運ぶ者もいれば後者を望む者もいるだろう。³⁰⁾しかしCrouchが言ったように、一つの展示で両方はできないのである。「第二のディレンマ」がここに表れている。

以上から、原爆展論争は現代の博物館が抱える根本的ディレンマが表面化したものと捉えることができる。AFAにとってNASMは「我々(AFA)の」博物館だった。彼らは唯一絶対の見方を提供する「神殿」としての博物館という認識を持っており、関係者である空軍兵士の経験が称賛されることを期待した。一方、NASM側は「フォーラム」としての博物館を念頭に置いており、展示については学芸員や大学研究者が分析的なまなざしで学問の最新成果を反映させるものと考えていた。それは唯一の見方を示すものではなく、多くの見方を提示することで来館者に考えさせようとするものだった。

このように、博物館に対する見方が異なっていた以上、論争は避けられなかった。更にNASMにとって不幸だったのは、マスコミがこぞってAFAを支持したことである。

いずれにせよ原爆展のキャンセルは、合衆国内外の来館者から原爆投下に関する一連の歴史を見る機会を奪ってしまったのである。³¹⁾

おわりに

博物館は「見る」というきわめてシンプルな認識方法によって、従来の教育方法の欠陥を補う独自の存在価値を訴えてきた。特にスミソニアン博物館群などは、その立地や規模に伴う巨大な集客力と相俟って、一大学研究者とは比べものにならない大きな社会的影響力を有してきた。しかも“national”の看板の背負っているため、その展示は公的な声明、あるいは国家の認可を得たものと見なされる。³²⁾それ故に今回のような事件が起こったわけだが、それは現代の博物館が抱えるディレンマを余すところなくさらけ出したことにより、原爆投下の解釈という個別の問題を超えてこれからの博物館のあり方を左右する重大事件だったと言える。³³⁾

最後に今後の博物館活動において重要と思われる点を3点まとめておこう。

まず第一に博物館の基本的なあり方についてである。合衆国では長年の議論の積み重ねによって博物館を「市民の教育施設」として社会に位置づけてきた。特に近年それははっきり表れている。³⁴⁾しかし教育の「目的」は何か。「愛国心の植え付け」なのか、「批判的認識力の養成」なのか。それによって博物館の性格は変わりうる。そういう点で博物館は本質的に国家のイデオロギーに左右されやすい存在であり、現に多くの博物館がイデオロギー装置として機能している。

しかし真に博物館が教育施設たりうるためには、批判的な視点を養うことを目的にせねばならないだろう。博物館が批判的検証を行わず、国益を全面に押し出したイデオロギッシュな態度に出れば、その学術的な地位を失うことにもなりかねない。批判的まなざしを失った博物館は、「死んだ」博物館となる。

第二に、批判的検証のためには、博物館における学問の自由とコミュニティとの対話が必要である。近時の博物館理論がフォーラムとしての博物館を志向しているからといって、博物館が正確な知識を提示する意図を放棄したわけではない。「より正しい」「より事実に近い」認識を提示しようという博物館側の意欲の表れが、近年盛んなコミュニティの参画による展示作成活動である。

複数のコミュニティとの対話は、事象を複眼的総合的に見ることができるという利点を持つ。また言葉というものは異なる集団には異なる含意を示すため、様々なコミュニティにあらかじめ展示台本をチェックしてもらうことも必要だろう。³⁵⁾しかしこれは理念としては高く評価できるものの、実践には多くの困難を伴う。³⁶⁾事実、NASMは1992年秋以降、原爆史研究者のみならずAFAや日本人関係者等とも繰り返し意見交換を行っていた。しかし残念ながら対話はおよそ「より正しい」認識を生み出すという理想からは程遠いものだった。AFAは退役軍人とその戦役は称賛されるべきだと言い、一方博物館側は人々は戦争の全容を知る権利があるという。両者の主張はかみ合うことはなかった。

博物館はどんなに厳正中立に振る舞おうと試みても、展示の最終局面ではすべての意見を反映させることは実質不可能であるため、そこに研究者の「判断」が生じる。それは尊重されるべきであろう。博物館における学問の自由とは、このようなものなのである。

しかしその博物館の努力も市民の認識が変わらなければ報われない。これが第三の論点である。とりわけ博物館が一般に流布している「神話」に批判的まなざしを向ける場合、たとえ博物館側が価値の一方的押しつけではなく情報の提供によって見学者に考えてもらう機会を作

ろうと意図していても、博物館を特別という目で見ると人々からすれば「博物館のお墨付き」としか映らない。市民の側にフォーラムとしての博物館を認める土壌がなければ原爆展の二の舞にならざるを得ないのである。ここに博物館の抱える一番の問題が潜んでいる。このような認識のズレはどうしたら解決できるのであろうか。

市民の認識を変えるというのは難しいことであり、博物館の意図を繰り返し伝える努力をすするしかない。原爆展論争は多くの退役軍人・マスコミが原爆展の原稿を見ることなく、*AIR FORCE Magazine*に載ったCorrellの批判を無批判に引用したために、博物館側の意図が歪められて広まってしまったことに直接の原因がある。何故博物館もマスコミに働きかけて誤解を解こうとしなかったのか。Wallaceは今回の騒動に関して博物館側が後手に回ってしまったことを失敗の原因と見て、以下のように述べている。「もし博物館が積極的に最初の台本—あるいは最終台本でもいいが—についての正しい情報を提示していたら、スミソニアン側が勝利していたかもしれない。」³⁷⁾

原爆展論争は、「歴史を保存・展示する意義は何か」「歴史は誰が作るのか」というより大きな問題へとつながる。この問題に対しては、アメリカ歴史博物館やワシントンDCのホロコースト博物館などの経験を比較考察する必要がある。これらについては別稿を期したい。

[指導教官 鈴木眞理助教授]

注

- 1) 展示台本の初稿は邦訳が出ている。フィリップ・ノビーレ/バートン・J・バーンステイン著、三国隆史他訳『葬られた原爆展 スミソニアンの抵抗と挫折』五月書房、1995、pp.53-239
[Philip Nobile ed., *Judgement at the Smithsonian*, New York:Marlowe&Company, 1995] 原爆展が中止になった詳しい経緯については、同書所収、ノビーレ「序文 スミソニアンが原爆を肯定させられるに至った経緯」pp.9-52、バーンステイン「あとがき 歴史をめぐる戦い」pp.241-289; Mike Wallace, "The Battle of the ENOLA GAY", *Museum News*, July/August 1995, pp.40-45/60-62; Richard H.Korn, "History and the Culture Wars:The Case of the Smithsonian Institution's *Enola Gay* Exhibition", *The Journal of American History*, December 1995, pp.1036-1063; Martin Harwit, "Academic Freedom in "The Last Act" ", *Ibid.*, pp.1064-1082; Paul Schadewald, "Chronology of the *Enola Gay* Controversy", *Ibid.*, pp.1083-1084 を参照。
- 2) ここでスミソニアン協会の位置づけについて言及しておく必要があるだろう。これは議会が制定した法律によって設置されたものではあるが、合衆国における多くの博物館同様、非営利組織(NPO)に属するものであって、政府機関ではない。理事会(a Board of Regents)によって管理・運営され、NPOとしての税制優遇措置を受けている。そのため、スミソニアン博物館群には“national”という語がついているものが多いが、これを「国立」と訳すのは誤りである。合衆国の博物館で“national”の語が冠されるのは、博物館の使命(mission)がそう名乗るに相応しいと議会が判断したためである。Ildiko Pogany DeAngelis, *U.S.Museums and the Nonprofit Sector*, Washington,D.C.:American Association of Museums, 1994, p.7
- 3) 合衆国の博物館展示をめぐる論争の簡単な歴史については、Neil Harris, "Exhibiting Controversy", *Museum News*, September/October 1995, pp.36-39/57-58 (*Journal of American History*, December 1995, pp.1102-1110に“Museums and Controversy:Some Introductory Reflection”と改題して再録)を参照。
- 4) Duncan F.Cameron, "The Museum, a Temple or the Forum", *Journal of World History*, vol.14 no.1, 1972, pp.189-202
- 5) 公共博物館は近代とともに生まれた。一般に最初の公共博物館と考えられているものはルーブル美術館(1973年)である。
- 6) 研究者と一般の人々との認識方法の相違について研究したJames Millerによると、一般の人々の76%が抽象的な理論よりも自分の直接の経験によって世界を認識するのに対し、研究者の76%は逆に抽象的理論を経験に優先させるといふ。James Miller, "Museums and the Academy:Toward Building an Alliance", *Journal of American Culture*, vol.12, Summer 1989, p.4
- 7) 合衆国では、1960年代に博物館が政府から直接財源の援助を受けるようになったのに伴い、来館者の社会的構成の分析が行われるようになった。これはフランスの社会学者 Pierre Bourdieuの影響を強く受けている。Paul DiMaggio/Michael Useem, "Cultural Democracy in a Period of Cultural Expantion:The Social Composition of Arts Audiences in the United States", *Social Problem*, vol.26 no.2, December 1978, pp.179-197 等。
- 8) 近年の博物館を考えるにあたり、「コミュニティとの対話」という視点は極めて重要である。コミュニティの参加によって展示を作り上げていくという考え方は、60年代後半のNeighborhood Museum運動から始まったものと思われる。詳しくは拙稿『アメリカ合衆国における博物館理念の変遷—Cultural Democratizationの視点から—(1995年度東京大学大学院教育学研究科提出修士論文) 第三章参照。なお、ここでいう「コミュニティ」は属性を同じくする人々の集団だけではなく、機能集団をも含むものとする。
- 9) Cameron, *op.cit.*, p.199
- 10) Steven D.Lavine/Ivan Karp, "Introduction:Museums and Multiculturalism" <IvanKarp and Steven D.Lavine eds., *Exhibiting Cultures:The Poetics and Politics of Museum Display*, Washington,D.C.:Smithsonian Institution Press, 1991>p.3
- 11) Cameron, *op.cit.*, p.199。また、Harrisは博物館のこの機能を「資格証明(credentialing)」と呼んでいる。Harris, *op.cit.*, p.1107
- 12) AFAについては主に、Wallace, *op.cit.*, pp.44-45/60-61 を参照。
- 13) 実は原爆展論争が起こるはるか前にも、エノラ=ゲイについて論争があった。エノラ=ゲイは、1949年にNASMが取得し、その後長らくワシントンDC郊外のシルバー・ヒルに保管されていた。NASMの新館建設に関する1970年の公聴会(現在モールにあるNASMの開館は1976年)で、新館に相応しいコレクションの基準が議論されたが、その際エノラ=ゲイの保管の是非が俎上に上った。上院議員Barry Goldwaterや下院議員Frank

- Thompsonはエノラ=ゲイを真に歴史的価値のある航空機とは見なし得ないとして、オハイオ州デイトンの航空博物館に委譲するよう提案した。結局、当時の館長Frank TaylorのはからいでNASMのコレクションとして残されたものの、公開はされなかった。技術史家のMichal McMahonは、1981年に既に、新しいNASMにエノラ=ゲイをはじめ、第二次世界大戦の爆撃に代表される攻撃的 (offensive) なテーマが省かれていることを、「博物館の危機」であると批判している。Michal McMahon, "The Romance of Technological Progress: A Critical Review of the National Air and Space Museum", *Technology and Culture*, Vol.22, 1981, pp.293-296
- 14) 理工系博物館のイデオロギー性については, *Ibid.*, pp.281-296 の他, Bernard S.Finn, "The Museum of Science and Technology" <Michael Steven Shapiro ed., *The Museum: A Reference Guide*, New York: Greenwood Press, 1990> p.62; 高橋雄造「科学技術博物館の歴史」『博物館学雑誌』第15巻第1-2号合併号, 1990a, pp.3-19; 同「科学技術博物館とは何か—科学技術博物館批判—」『技術と文明』6巻2号, 1990b, pp.23-41 など。但しこのような理工系博物館のイデオロギー性は、既に1930年代に Charles R.Richards や Laurence Vail Coleman, Thomas R.Adamsらによって指摘されていた。McMahon, *op.cit.*, pp.283-285
- 15) 例えば, Center for Science and the Public Interest, *White Paper*, Washington, D.C., 1979
- 16) McMahon, *op.cit.*, p.296; Finn, *op.cit.*, p.61。高橋はその顕著な例として, スミソニアン協会傘下のアメリカ歴史博物館 (National Museum of American History) を挙げ, その展示を「ディスプレイというよりもメッセージ (問題提起) である」と評している。しかし科学・技術と社会との相互関係を示す場合, 従来の科学・技術万能主義にかわって, しばしばアンチ・テクノロジーの様相を帯びるため, 科学・技術者からは反発を買いやすい。高橋も現代の理工系博物館にとって科学・技術と社会との相互関係を示すことは自明のように見えると述べる一方で, その必要性・可能性・現実性については留保している。高橋 (1990a), *op.cit.*, p.13。最近ではDDTの害や遺伝子工学の危険性について批判的に展示した "Science in American Life" が, スポンサーとして530万ドル出資したアメリカ化学学会から強く非難されている。Stephen Budiansky et al., "A Museum in Crisis: The Smithsonian heads into rough times after the Enola Gay debacle", *U.S.News & World Report*, February 13, 1995, p.75
- 17) 湾岸戦争における空軍の貢献を称賛する展示など。Wallace, *op.cit.*, p.60
- 18) *Ibid.*。その他, 第一次世界大戦の展示についても, 空軍の役割を過大評価しパイロットの勇敢さ・格好良さを殊更に讃えていた従来の展示を, 当時はまだ空軍は二次的な役割しか果たしていなかったこと, 実際兵士には様々な危険が降りかかったこと等に言及する展示に改めた。これらの展示替えに対して, マスコミは概して好意的な反応を示した。Kohn, *op.cit.*, p.1052
- 19) パーンステイン, *op.cit.*, p.274
- 20) Wallace, *op.cit.*, p.61
- 21) *Ibid.*より引用。
- 22) Martin Harwit, "The Enola Gay: A Nation's, and a Museum's Dilemma", *Washington Post*, August 7, 1994, p.C9
- 23) ノビーレ, *op.cit.*, pp.49-50 より引用。
- 24) パーンステイン, *op.cit.*, pp.254-274
- 25) ノビーレ, *op.cit.*, p.24 より引用。
- 26) *Ibid.*, p.27; パーンステイン, *op.cit.*, p.248; Kohn, *op.cit.*, p.1041 より引用。
- 27) *Washington Post*, January 31, 1995, p.A1
- 28) この「称賛か, 分析か」という対立はNASMのみならず, 「多文化教育」に通じる難しい問題としても指摘されている。詳しくは, John Higham, "Multiculturalism and Universalism: A History and Critique", *American Quarterly*, Vol.45, No.2 (June 1993), pp.195-219
- 29) NASM設立の各場面におけるこの対立については, Alex Roland, "Celebration or Education? The Goals of the U.S.National Air and Space Museum", *History and Technology*, vol.10, 1993, pp.77-89, あるいは McMahon, *op.cit.*, pp.291-296 が詳しい。但しRolandによれば, NASM設立の際に唱えられた「教育」には, 青少年を科学・技術へ誘うという旧来の理工系博物館の科学・技術万能主義的「教育観」が表れているだけで, 批判的精神の涵養という視点は抜けているという。また, McMahonはNASMこそが博物館の伝統的な教育・研究機能に対するアンチ・テーゼであり, スミソニアン内にこれほどイデオロギッシュな博物館はかつて存在しなかったと述べている。
- 30) 本文ではNASMとAFAの博物館認識について述べるにとどまったが, では来館者はどのような意図で博物館に足を運ぶのだろうか。残念ながらこの点について, はっきりしたことはわからない。しかし, 「彼等が求めるのは, 何かファッションブルな体験をエンジョイすることであり, プレーであり・ファニーなでぎとであり・エンターテイメントである。」(高橋 (1990b), *op.cit.*, p.35), 「博物館へ出かける多くの人々は論争や非難ではなく, 美しく確固とした過去を望んでいるのである。」(Andrew Gulliford, review of "The West As America: Reinterpreting Images of the Frontiers, 1820-1920", *Journal of American History*, June 1992, p.206. "The West As America" は, 1991年にスミソニアン傘下の National Museum of American Art で行われた合衆国西部に関する新解釈を提示したもので, 原爆展同様, 論争を巻き起こした展覧会としてしばしば言及される) という指摘は参考になる。これらを見ると, 近年博物館が意図している「問題提起を行い, 来館者に考えてもらう」という展示の理想は, 博物館側の独りよがりとも見なしうるのではないだろうか。
- 31) ある調査によると, アメリカ人の60%が日本に原爆投下を決定した大統領が誰であるか知らず, 35%は最初の原爆が広島に投下されたということを知らないという。また, 別の調査によると, アメリカ人の4人に1人が日本に原爆が投下されたことさえ知らないという。*New York Times*, March 1, 1995, p.A19。ただ, 今回の論争が原爆とエノラ=ゲイへの関心が高まったのは皮肉なことである。バーンステイン, *op.cit.*, p.288; Thomas A.Woods, "Museums and the Public: Doing History Together", *Journal of American History*, December 1995, p.1115
- 32) そのため博物館には大学のような学問の自由は認められないと考える意見も存在する。Wilcomb E.Washburn, "Education and the New Elite: American Museums in the 1980s and 1990s", *Museum News*, March/April 1996, p.63
- 33) NASMでは原爆展の後に計画していたベトナム戦争航空展を最低5年延期することに決め, またHeyman会長はスミソニアン博物館群のその他の展示に関しても「リヴィジョニストの歴史」と見なしうるものについては改訂することを公約している。そのような政府の「検閲」に対して, 多くの学芸員は, 今後展示にいかなるコンテキストや解釈の提示も許されなくなるのではないかという強い不安を抱いている。Budiansky et al., *op.cit.*, p.74
- 34) 合衆国は伝統的に博物館を教育施設として見なししていたものの, 一般的には研究部門 (curatorial staffs) が実権を握り, 教育部門 (educational staffs) は軽んじられていた。しかし近年,

その勢力が逆転しつつあるという。Washburn, *op.cit.*, pp.60-61

- 35) Harwit (1995), *op.cit.*, p.1078。もちろん、コミュニティは国内のものにとどまらない。とりわけ戦争を記憶し分析する人文社会科学の成果は、国家の枠を超えて共有されなければならないと思われる。
- 36) 例として、黒人コミュニティの展示を企画した場合を考えてみよう。まず誰がコミュニティを形成しているのか、その判断が難しい。コミュニティ内部にはしばしば多様な見解が存在するが(そしてそのすべてについて展示することはまず不可能である)、誰がそのコミュニティを代表しているのか、特定がまた難しい。ある人がコミュニティを代表して発言しているとき、他の人からそれについて異議が唱えられた場合どうすればよいのか。そもそも黒人だけが黒人の歴史を語るることができるのか。博物館が収集・保存・展示すること自体に異議が唱えられた場合、どのように反駁すればよいのか。論争的な問題についてさまざまな視点を提供したにも関わらず、ある一つの見方のみが正しく、意見を交わすという考え方自体が相対主義的で非論理的だというドグマティックな主張がなされた場合、どう対処すればよいのか。そもそも60年代以降盛んになったコミュニティ参加による展示活動は、今まで一方的に解釈される「客体」としての存在だったマイノリティたちが、自らの歴史を「主体」となって語ろうという運動だった。しかし原爆展の場合、誰が当該コミュニティを形成しているというのか。誰が「主体」となって歴史を語りうるのだろうか。第二次世界大戦や原爆投下、戦後の国際的に重要な核兵器拡散については合衆国市民全員(更には人類全体)にとっての関心事なのではないか。エノラゲイについて語りうるのは退役軍人だけなのだろうか。退役軍人だけが原爆の「真の」歴史を知ることができるのだろうか。Bernsteinは次のように批判している。「つまるところ、太平洋戦争でどれほど兵隊たちが血みどろに戦った経験があるとしても、その経験のおかげで、1945年当時のワシントンの重要な政策決定者が原爆投下を決定した理由が自分たちにわかるなどと言えるであろうか。しかもずいぶんと時間がたっているのである。」(バーンステイン, *op.cit.*, p.281)
- 37) Wallace, *op.cit.*, p.62。但し彼らの認識を変えるのは容易ではない。現状への対処の仕方としては、来館者の望む博物館像にも一定の配慮を払って展示を構成するしかないだろう。博物館は来館者を無視できないのである。Woods, *op.cit.*, pp.1111-1115

[付記]

本稿脱稿後、Harwit元館長自身の手になる、*An Exhibit Denied: Lobbying the History of Enola Gay* (Copernicus, 1996)が出版された。また11月上旬にHarwit氏が来日した際、疑問点のいくつかを氏に直接インタビューする機会を得た。これらに関してはまた別の機会に論じたい。